

冷徹外科医のこじらせ愛は
重くて甘い

伊東悠香
Yuka Ito

目次

冷徹外科医のこじらせ愛は重くて甘い

5

書き下ろし番外編

いつだって君となら

327

冷徹外科医のこじらせ愛は重くて甘い

第一章

長らく立ちこめていた黒い雨雲は長く空に留まらず、初夏が訪れる気配が感じられるこの頃。

私、月野^{つきの}胡々^{ここな}菜はフロアに飾る花を腕に抱いて空を見上げた。薄雲の間からは青空が覗いている。

そんな陽気の中、私は小さくため息をついた。

（六月も終わりかあ、もうすぐ誕生日が来てしまう）

以前は楽しみだった誕生日が少し憂鬱になる。

気持ち的にはまだ二十代でも、迎えるのは二十九歳の誕生日だ。

（本気で恋人は欲しいと思うけど、慌ててもいいことがないのは先日身に染みたばかりだし……）

「っと、時間がない！」

花束を持ち直し、止めていた足を再び動かす。

そのとき、不意にスマホの着信音が鳴った。花束を片手に持ち直し、発信者を確かめる。（知らない番号……誰だろう。もしかして取引先の人？）

「はい、月野です」

『お世話になっております。私、マルネットの高橋^{なかはし}と申します！』

「マル……ネット、ですか？」

『はい。退会されてから半年以上経過しましたが、その後どんな様子でしょうか』

「……あ、ああ！ 結婚相談所の方ですか」

そう、私は一年ほど前に勢いで結婚相談所に登録をしたのはいいものの、あまり気が乗らないという理由でほぼ活動しないまますぐに退会してしまったのだ。

まさかこのタイミングで電話がかかってくるとは。

「ええと。今仕事なので、ちょっと……」

『失礼しました。ではまた夕方にかけていただき……』

「いえ、連絡は結構です。今は入るつもりないので」

『お相手がお決まりに？』

「そうではないんですが」

『でしたらぜひお話だけでも！』

（しまった、決まったって言えばよかった）

わかりやすく勢いを得た相手は、ダメ押しのようなセリフを吐いた。

『今日が人生で一番若い日ですよ。今なら再入会の方には特別価格で――』

「結構です！」

思わず大きな声で断りの言葉を告げ、さっと通話ボタンを切る。

再度かけてくる様子がないのを確認し、がくりとうなだれた。

（人生で一番若い日なんて、そんなことわかってるよ！ デリカシーないなあ）

勤務するオフィスの自動ドアを抜け、エントランスの奥に待機している受付の女性に買ってきた花束を差し出した。

「こちら、今週のぶんです」

「ありがとうございます！」

彼女は立ち上がって笑顔でそれを受け取った。

「花瓶への活け方は大丈夫ですよね」

「はい、あとはこちらでやりますので」

花の世話をすっかりお願いし、私は自分のオフィスへと戻った。

「またなの？」

総務課の手前にある経理課の入り口で、廊下に圧のある声が響いた。

（この声は……）

「無理なものは断らないと。どんどん仕事が溜まって回らなくなるわよ」

（やっぱりおハルさんだ！）

おハルさんは入社当時私の教育係をしてくれた大先輩で、今でも仲よくしてもらっている。そんな彼女が心配がゆえに後輩社員に見る姿は珍しくないけれど、最近ではそれが彼女のイメージに不利に働いているのを私は勝手に心配している。

余計なお世話と思いつつ、経理課にそっと足を踏み入れ、おハルさんに耳打ちした。

「おハルさん。もうお昼休憩です」

すると、彼女はハッとしたようにこちらを振り返り、壁にかかった時計を見て冷静に頷いた。

「そうね。彼の休憩時間まで奪う権利はないものね」

おハルさんがもういいわというように踵を返すと、男性社員はぺこりと軽い会釈だけしてフロアを出ていった。

（おハルさんのこと、悪く思っていないといいなあ……）

私もお人よしと言われて久しいけれど、おハルさんもなかなかなのだ。彼女とは隠し事のできない性格が合っていて、毎日お弁当と一緒に食べている。

「災難でしたね」

おにぎりを頬張りながらあまり重くならないように声をかけると、おハルさんはもうさつきのことは忘れたようにキョトンとしている。

「災難はココちゃんでしょう？ マンションに入れなくなったってどういうことなの？」

「あ——、それは……」

急に自分の話を振られて焦る。

確かに私は現在借りているマンションに帰れなくなつて、三日ほどビジネスホテルから出勤していた。

（初めて利用したマッチングアプリで一回会っただけの相手につきまとわれるなんて……確かにすごい災難だよな）

プロフィールではわからない部分をお互い知れたらいいな」という気持ちで会った私とは違い、相手はすぐにでも結婚してくれる人を探していたみたいだった。

まだカフェで趣味などを探り合っている段階で、一軒家とマンションどちらに住みたいかとか、子どもは何人が理想かとか矢継ぎ早に聞かれてまいった。

（合わないなと思って、その日のうちに断つたのに）

プライドを傷つけたのか、その日から私への嫌がらせのような行為が続いている。

『嘘つき』『許さない』などとなるる内容のメールが届いたかと思うと、急に『愛してる』

『また会いたい』という未練を示すようなメールが届く。それだけならブロックすればいいけれど、SNSにもそれらしい人がいろいろメッセージしてくることも続いている。

さらには、マンションを出たところで変装をした彼がこっそり立っていたこともあつて、そのときは流石に背筋が凍った。

これはもう、ストーカーと言つていいレベルなのではないだろうか。

（結婚どころか、お付き合いすら不可能な人だった……）

「引越したら？」

おハルさんのズバリとした言葉に私は素直に頷いた。

「それも考えたんですけど、貯金もそんなに多くないのでそこまでしてしまつと……身動き取れなくなりそうで」

「……そうよね、ココちゃんは悪くないのに、そんなやつのためにお金使うなんて馬鹿げてるわよね。かといつて、マンションに戻つても危ないし。何か対策を考えるわ」

眉根に皺を寄せ、自分のことのように思考を巡らせている。

こういうとき、おハルさんは誰よりも真剣に向き合ってくれる。そんな彼女が私は大好きで、まるで本当のお姉さんのように慕っている。

普段表情があまり変わらないから近寄りがたい印象があるのかもしれないけど、彼女は本当はすごい美人なのだ。その理知的な顔は誰もが整っていると認めているし、後ろ

で束ねている黒髪は清潔感があって美しい。

「こんなに素敵な人なのに、会社では怖い人だと誤解されてるのが私は悔しい」
頬を膨らませる私の横で、おハルさんがハツとしたように顔を上げた。

「なんだ、簡単じゃない！」

彼女は髪を束ね直すと、キリッとした視線を私に向けた。

「今日からうちに来なさいよ」

「え？」

唐突な申し出に、私は思考を止めておハルさんを見返す。

「うちって……おハルさんどこですか？」

「そうよ。部屋は掃除しきれないほどあるし、好きなだけ滞在していいわよ」

「どんな豪邸に住んでるんですか」

おハルさんの身につけているものを見ると、結構いい暮らしをしている人だろうと想像していたけれど。私は会社での彼女しか知らず、正直、プライベートはほとんどわからない。

（もしかして、すごいお金持ちのお嬢様だったりして）

「引越越しサービスを利用して、ココちゃんのものはうちに運んでもらったら？」

「え、ええ。でも……」

（今まで食事をご馳走してもらうことくらいはあったけど、生活まで頼ってしまっているんだろうか）

「すごく嬉しいんですけど。おハルさんにそこまでしてもらうわけには……」

「いいのよ」

遠慮しようとする私の言葉を遮り、おハルさんはさらに誘いの言葉を加えた。

「うち、広いの人がほとんどいなくて寂しいのよね……ココちゃんに来てもらいたいつていうのは私の我儘わがままなのよ」

そこに嘘はなく、おハルさんは心から私に来てほしいようだった。

「ほ、本当にいいんですか？ でも、同居のご家族が驚かれるのでは……」

（確か妹さんと弟さんがいたような）

「妹には私から伝えるわ。弟はほとんど帰ってこないし、両親は訳あって別々に暮らし
てるから。だから安心して」

（そこまで言ってもらえるなら）

「ありがとうございます……じゃ、お言葉に甘えて……」

「よかった！ ココちゃんと暮らせるなんて嬉しい！」

おハルさんにぎゅっと抱きしめられ、ちよつと照れてしまう。

（こんなに歓迎されるなら、私も嬉しいかも）

こうして、私はおハルさんのお宅に目処がつくまで住まわせてもらうことになった。

「あれが私の家よ」

お手伝いさんによって解錠された外門の奥には、確かに掃除しきれないほど部屋があるだろうと思われる大きな洋館が見えた。

「家……っていうか、お屋敷ですよ」

「ふふ、皆そう言うわね」

眼鏡の奥にある涼しい目を細め、おハルさんは淡々と進んでいく。私もその後ろを慌ててついていった。

お屋敷の前には運動会でも開けそうな広い庭が広がっていて、スプリングラーで水を撒いている芝生は青々としていて眩しい。奥には池のようなものが見え、側には可愛い屋根付きのベンチが設置されている。

外に出なくても、ここを散歩しているだけで観光気分が味わえそうな風情だ。

「おハルさんってお嬢様だったんですね」

「アラフォーのお嬢様っていうのも、ないと思うけど」

くすくすと笑って、おハルさんはこちらを振り返った。

「ただ、うちはちょっと特殊な人間が多いから最初は戸惑うかもしれないわ。一番の間

題児は弟ね」

「弟さん！ 確か、外科医をされてるんですね」

「そうよ。今日は珍しく家に寄るって言ってたから、紹介できるかもしれないわ」

おハルさんの弟さんは凄腕の外科医で、誰でも名前を聞けば知っている私立病院に勤務しているとか。その精密でロボットのような高度な手術テクニクと整ったルックスで、医者であるにもかかわらず、患者だけでなく医療関係者からも人気だと聞いたことがある。

有名な医療雑誌の表紙を飾っているとおハルさんから聞いたときは、思わず本屋に走ってしまった。

（確かにすごいイケメンだった。そんな人とひとつ屋根の下で……!?!）

今更ながらアワアワしている私を見て、おハルさんはクスリと笑った。

「そっか、ココちゃんは男性の兄弟がいらないから緊張するわよね」

「あ、いや……」

（緊張するのは、そういう理由ではないのですが）

「弟さんって、普段どちらで生活されてるんですか？」

「それが、一人で楽に過ごすほうがいいって、ほとんど病院近くのホテルを住まいにしてるの。妹がうるさいから時々戻ってくるけど」

「妹さん……は、まだお若いんですしたっけ」

「今年十七歳。幼い頃に事故に遭ってしまったって、足が不自由なの」

「そうだったんですね」

高校は通信制の学校に通っていて、お屋敷で過ごす時間が長いのだという。

（ご両親と一緒に住んでいないという事情もあるようだし、おハルさんにも人知れず抱えている悩みがあるんだろうな）

「まあ、いずれ家族のことは少しずつ話すわね。それにココちゃんはその事情は気にせず、自分の家みたいにくつろいでね」

「あ、はい」

私は深く頷いて、それ以上の質問は控えた。

おハルさんにはこりと微笑むと、到着したドアの前でもう一度ベルを鳴らした。確認するまでもなく、再びお手伝いさんによってロックが解除される音が響いた。

すると、頭上から驚くほど低い男性の声が降ってきた。

「来客があるなんて聞いてなかったけど」

「うわっ！」

驚いて振り返ると、そこには映画か何かから飛び出してきたのかなと思うほど整った顔立ちをした男性が私を見下ろしていた。

（こ、この人は……っ）

軽く百八十センチは超えているような長身で、羽織った淡いグレーのコートは上質そうで、放つオーラに後ずさりしてしまうほどのまばゆさがある。

切れ長の鋭い目は当然のように美しいけれど、見つめたら一瞬で相手を凍りつかせるような温度のないものだった。

「どなた？ 姉貴の友達？」

その視線を受けた瞬間、背筋がビシッと正されるのを感じた。

（虎とかライオンとか、動物園でしか見たことないけど……肉食獣ってこういう目だね？）

そう思わせるほどに、その男性は物静かな雰囲気とは裏腹な目をしている。

そんな感覚に陥っていたけれど、過ぎた時間はおそらく二秒くらいだ。

私が固まっているのを見て、おハルさんは私の前に立ってその男性を見上げた。

「会社の後輩を連れて帰るって連絡したわよ。三回も。でも、電源切ってたみたいだから」

「あー……今日、手術ふたつ入ってたから……オフのままだった」

だるそうにそう答えると、ポケットからスマホを取り出して通信をオンにした。

「教えてくれてサンキュ」

それだけ言って興味なさげに中に入っていこうとする。それを見て、おハルさんは慌

てて彼を呼び止めた。

「待って、彼女、今日からしばらくここに泊まってもらう予定だから。紹介させて」

「……」

一秒も無駄にしたくないといった感じでため息をつくとき、こちらへ向き直った。

「手短にどうぞ」

「彼女は月野胡々菜ちゃん。会社の後輩なの。ちょっと住んでる場所に問題が起きてね、しばらくここから会社に通ってもらうことにしたのよ」

紹介を受け、私は今更ながら深々と頭を下げた。

「つ、月野胡々菜です！ 急で大変ご迷惑をおかけします!!」

「どうも……桐生斗真です。姉がお世話になってます。ごゆっくりどうぞ」

斗真さんは抑揚のない口調でそう言うとき、もういいかと言わんばかりの態度で開いたドアの隙間に消えていった。

（な、なんて無愛想な……）

雑誌の表紙を飾っていた彼はもう少し柔らかな笑みを浮かべる紳士だった。だから多少優しげな印象もあったけれど。

（第一印象ですでに嫌われたのか？ いや……まだ挨拶しただけだから、そんなわけないか）

手術をふたつもこなしてきたというし、疲れているんだろうか。

「ごめんね。斗真は仕事モードのとき以外は、いつもあんな感じよ。少しずつ慣れてくると思うから、最初は我慢してね」

「はい……あ、いえ」

「ココちゃんと合うと思うのよね」

「合うって？」

「相性がいーいんじゃないかなーと思って。どう、斗真を恋人候補にしてみたら？」

「ええっ!？」

今会ったばかりの人に、そんな発想はとても持てない。

私の驚きっぷりを察して、おハルさんは苦笑した。

「冗談よ。気にしないで」

そう言っただけ私の肩にボンと手を乗せると、斗真さんの消えていったエントランスの中へ足を進める。

（驚いた。おハルさんらしくない冗談だったなあ）

後ろを追いながら、私はまだ混乱している頭を一生懸命鎮めた。

ふくよかで優しく気なお手伝いの田嶋^{たじま}さんに挨拶をし、そのあとは彼女に建物の中を一

通り説明してもらった。

「それで……こちらが、月野様にご用意したお部屋でございます」

「わ、いいんですか？　こんな広いお部屋を」

十畳くらいある部屋をぐるっと眺めて、その広さとシンプルに置かれた家具や敷かれた絨毯の高級さに目を見張る。建物には少し古めかしい空気が漂っていたけれど、揃えてあるタンスやドレッサー、ベッドなどはホワイトで統一されていて、とても近代的で清潔感のある部屋に仕上がっている。

「晴子お嬢様は^{はるこ}高校生までご使用になっていたお部屋です」

「そうなんです」

まだ珍しげに部屋を見回しながら、来る前に急いで自分のマンションで荷造りしたキャリーケースを置く。当面は暮らせるように、着替えやらお化粧品やら通帳やら、なかったら困ると思われるものを詰めこんである。

「ここにあるものは自由に使っていくとのことでしたので、ご遠慮なく」

「ありがとうございます」

田嶋さんが去って、とりあえず深く深呼吸する。

おハルさんの至れりつくせりの心遣いにより、私は一週間ぶりに恐怖を感じることをなく過ごせる場所を確保することができた。

（問題はまだ解決してないけど、とりあえず冷静になる時間はもらえたなあ。ありがたい）

「はー……よかった」

真っ白なリネンでコーティングされたベッドに体を横たえたと、ほどよいスプリングが私を優しく包んだ。

（ふかふか……寝ないように注意しなくちゃ）

そう思っているうちに寝入りそうになっていると、スマホにおハルさんから連絡が入った。

「ん……は、はい。胡々菜です」

『休んでるところごめんね。少しくつろいだら一階のダイニングに来てくれる？　夕飯を用意してるから』

「はい。あ、お手伝いします」

『気づかい不要よ。うちは専属シェフと田嶋さんが全部やってくれるから』

「そう、なんですか？」

（お抱えシェフがいる家って本当にあるんだ）

想像を超えるお嬢様ぶりに、驚きで目が覚めた。

「すぐに行きますね」

『ゆっくりでいいわよ』

優しくそう言って、おハルさんは電話を切った。

「ああ、こんなにしてもらって……おハルさんには一生頭が上がりなくなりそう」
「にしても、おハルさんは何者なんだろう」

今までは会社での付き合いだしと、あまりプライベートに突っこんだ話はしてこなかったけれど、一緒に生活させてもらうとなると俄然興味が湧いてしまう。

「タイミングを見ていろいろお話を聞こうっと」

ベッドでの軽い休憩のおかげで元気を取り戻した私は、身だしなみを整えて、少し緊張気味に一階のダイニングへと向かった。

「待ってたわよ」

庭と同じくらい広いリビングに設置されたテーブルに、すでに着席しているおハルさんがラフな部屋着姿で微笑んでいた。その姿は会社にいるときとはまるで別人で、思わずまじまじと見つめてしまった。

「そんなに見つめられると照れるわね」

「あ、すみません。おハルさんがあまりにキレイで」

長く艶やかな髪を下ろした彼女は、ミステリアスな雰囲気醸す美女だった。こんな姿を会社の人が見たら、人気が出るに違いない。

「ふふ、ありがと。さ、私の観察はこれからいくらでもできるから、まずは食卓について」
「は、はい」

卓上には食べきれないほどのご馳走が湯気を立てて並んでいた。
すると、廊下から若い女の子のはしゃぐ声が聞こえた。

「あ、^{えま}絵葉が来たわ」

（絵葉ちゃん。おハルさんの妹さん。わードキドキする！）

身構えていると、斗真さんに抱っこされた絵葉ちゃんが入ってきた。

（肌が白い……お人形さんみたい）

そんな絵葉ちゃんを横抱きにいる斗真さんは、まさに王子様。それくらい彼はスタイルも整っているし、顔も完璧なシンメトリーで構成されている。

（改めて見ると、こんな完璧なイケメンってそうそういないよね）

私はときめくより前に、映画でも見ているかのようにポカンと二人の姿を見ていた。

「ほら、もう降りろ」

斗真さんは絵葉ちゃんをそっと床に下ろして席につかせた。そして、彼女の隣に座ると、私とバチッと目が合った。

（うわ、いきなり私の目の前に座るとか。びっくりするよ）

「あ、あの。絵葉さん、はじめまして。月野胡々菜といいます」

二人の視線が私に向いていて、緊張で挨拶がしどろもどろになる。

「私、おハルさん……いや、晴子さんの職場の後輩でして。今日からここに……」

「お姉様から聞いてるわ」

全部を語る前に言葉を遮り、絵葉ちゃんは私を値踏みするようにじっと見た。それからふっと息を吐くと、ナプキンを膝に敷きながら短く言った。

「長くいるわけじゃないんでしょ？」

「あ、そうですね」

「絵葉、そういうときはごゆっくりって言うものよ」

「……ごゆっくりどうぞ」

（そりや唐突に同居する人間が現れたら、すぐに歓迎はできないよね）

絵葉ちゃんの気持ち察しつつ、私はもう一度丁寧に頭を下げた。

「ご迷惑にならないようにしますので、よろしくお願いします」

「ふん」

勝気を隠さずツンと横を向く顔は整っていて、やっぱりお人形さんみたいだ。

（いずれ仲よくなれたらいいな……今日のところは、受け入れてくれただけで感謝だな）

「今日はせっかく皆で食卓を囲めたんだから。乾杯しましょうよ」

おハルさんの提案で絵葉ちゃん以外はワインで乾杯をすることになった。

食前酒程度の軽い白ワインを口にしたあとは、シェフが腕を振るったという絶品のイタリアンを遠慮なくペロリと完食してしまった。

シーザーサラダ、オニオングラタンスープ、ジェノベーゼパスタ、ミラノドリア、フルーツゼリーのデザート……

すべてレストランで出されるものみたいに美味しく、夢のようだった。

「……住む場所がない上に、食べるのも困る状態だったのか？」

私の様子を見ていた斗真さんが、ぼそりとそんなことを呟いた。

私は目の前のすっかり平らげた空の皿を見て、急に恥ずかしくなる。

「い、いえ！　ちゃんと賃貸のマンションに住んでますよ。今はちょっと事情があって、部屋が使えなくて……」

（ストーカーから逃げてる、なんてここでは言えない）

「あ、あと。こちらのお料理があまりに美味しくて……っ」

焦りながら説明する私を、彼は訝しげに見ている。

「……へえ、そうなのか」

どうでもいいふうに答えると、口元を拭って、お料理が半分も残っている状態で席を立った。

「もう行っちゃうの？」

絵菜ちゃんが寂しそうに見上げるけれど、斗真さんはスマホに入った連絡のほうに気を取られている。

「悪いが今夜はかまってやれない」

冷静な口調でそう告げると、真剣な表情でリビングを去ってしまった。

「……寂しいな」

涙目になる絵菜ちゃんをおハルさんが励まして、気分転換に車椅子でお庭の散歩をしてもらえないかとお手伝いさんに伝えた。

（絵菜ちゃん、お友達とかいないのかな。広いとはいえ、ずっとお屋敷の中でしか暮らせないのは寂しいよね）

この環境では、あの完璧に格好いいお兄さんに依存してしまうのもわかる気がする。

（私がお話し相手になってもいいけど）

とは思ったものの、とりあえずでしゃばったことをするのはやめて、私はおハルさんと絵菜ちゃんにも挨拶をして部屋に戻った。

食事を終えた私は、ほろ酔い気分で自室に戻った。

自室だと疑いもせずにドアを開けると中は真っ暗で、どこに何があるのかわからない。（灯りってどこでつけるんだっけ？）

暗闇の中で手探りしていると、不意に人の気配がして背筋が凍った。

「だ、誰かいるんですか？」

その問いに答えるように、卓上の淡い照明がついた。途端、斗真さんの顔が浮かび上がる。

「斗真さん!? な、なんで……」

「それはこっちのセリフなんだけど」

彼はベッドから起き上がると、はあとため息をついてこちらに歩み寄ってきた。

「初日から夜這いでもするつもりか？」

「は？」

「趣味じゃないが灯りを消せばいけるかも」

「な……っ、何言ってるんですか!」

（失礼すぎる）

本気で怒りそうになったけれど、酔っ払いの戯言かと心を落ち着ける。

（ていうか、そもそもここは私の部屋で……）

「って、あれ？」

（もしかして私が部屋を間違ってる!?）

その可能性を感じてヒヤリとした。

暗がりに慣れてきた目で辺りを見回すと、そこは壁一面の本棚だ。明らかにさつき案内された部屋と違う。

(やってしまった)

会って早々の男性の部屋に入りこんでしまった。

(で、でも確かに二階の奥の……)

「あなたに割り当てられた部屋、隣の部屋だろ」

「っ、ああっ！」

(ドアの形が同じだから、ぼんやりして間違っちゃったのか！)

明らかに私のうっかりが出てしまったのだとわかり、一気に焦る。

「すみません、お部屋を間違えました！」

「ノックもなく唐突に不審者が入ってきたら、あなたならどう思う？」

「どうって……」

(いい気持ちはしないよね)

とは思っけれど、斗真さんのただならぬ様子に私は全身が完全にこわばって動けない。

「怒って当然と思います」

「正解。出てってくれる？」

「あ……」

(出ていけって言いたいのにね。それならそうと言ってくれたらいいのに)

回りくどいし、意地悪だ。

「し、失礼しま……ぶっ」

慌てて押したドアがビクともせず、思いっきり鼻先をぶつけてしまった。

(うう、格好悪い)

自分が悪いとはわかってはいるけれど、どこか素直な気持ちになれない。私は斗真さんの目を見ないまま部屋から出ようとした。するとグッと肩を掴まれ、唐突に彼の顔が近づいた。

(えっ?)

「胡々菜」

「っ!？」

唐突に名前を呼ばれ、心臓がドクリと大きく脈打つ。

「……って名前で合ってるか？」

「あ、合ってます」

(か、顔が近い)

「苛立ちがおさまった。一応礼を言う」

「? はあ……」

（私、何もしてないんだけど）
警戒して身を縮めていると、斗真さんは肩に置いていた手を離し、私の腰を抱いて自分のほうへと引き寄せる。

（っ、何？）

驚きのあまり目を閉じると、後ろでガチャリとドアの開く音がした。

「……このドア、手前に開くようになってる」

「あ、ああ……」

ドアを大きく開けると、彼は私を軽く押して廊下に出した。

「面白い隣人ができた。おやすみ」

彼はドアを閉める前、そんなことを言って口元を緩めた。

「おやすみ……なさい」

閉じられたドアの前で私は一瞬ぼかんとしたけれど、そのあと猛烈に心臓がバクバクし始めて、経験したことのない鼓動の激しさに驚いた。

（な、何これ……あとからきた。驚きすぎてフリーズしてたみたい）

「……と、とりあえず部屋に戻ろう」

よろめきながら今度こそ間違いないさつき案内された部屋に入り、そのまま逃げるようにベッドに飛びこんだ。

なぜか、今、入社試験以来の鼓動の速さを感じている。

斗真さんの声と、肩を掴まれたときの手の感触がまだ生々しく残っている。なのに、そんなに嫌な感じはしていない。

（男性に触れたこと、ほとんどないのに……まさかおハルさんが言ってたみたいに、相性がいい？ いやいや……恋人とか、そんな簡単になれるものじゃないよ）

首を振りながら、自分の動揺っぷりに困惑する。

今日一日で起きた目まぐるしい展開に、心がいつになく荒れているのは確かだ。

どちらにしろ、斗真さんとの出会いは、私に相当なインパクトを与えたみたいだった。

そのインパクトがさらに大きくなったのは、一週間ほど経ったある日。

会社帰りのことだった。

その日は梅雨の再来のように雨が多くて、強い湿気の中、急いで帰ろうと傘を深くさして足早に歩いていた。

ストーカー問題のほうはまだ完全な解決には至っていない。管理人さんから、不審な男性がドアの前にプレゼントらしい花などを置きにきていると連絡が入ったのだ。

理由を話してその花を処分してもらい、私はいよいよマンションには戻れないことを悟った。

（いつまでもこんな状態を続けているわけにはいかない。でも、どうしたらいいんだろう……）

解約手続きはオンライン上でできるらしいし、理由があれば部屋の中のものも業者經由で引き払ってもらえるのもわかった。

ただ、新規で借りる場所を見つけても、引越先を知られたら意味がない。

おハルさんに相談した結果、相手のしつこさを見ると、すぐに行動は起こさないほうがいいというので、桐生家にもうしばらくお世話になることになった。

（警察に訴えるにしても、別に危害を加えられたわけじゃないからなんとも言えないし……困った）

パシヤパシヤと水飛沫^{みずしぶき}が上がる足元を見つめながら、今後の身の振り方を真剣に考える。

そのとき、私の横に車がスッと停まった。

知らないふりで足を進めると、車はゆっくりとついてくる。

（え、やだ。何？）

まさかストーカーの彼が車で追ってきているのかと想像すると寒気がした。走って逃げたかったけど、雨が強くて体が思うように動かない。

「どっか、入れるお店……」

周囲を探すけれど、都合よく逃げこめそうなお店が近くに見当たらない。

コンビニももう少し先まで歩かないとない。

（どうしよう）

スマホを握りしめ、いざとなったらおハルさんに電話しようと構えていると――

「なんで逃げる？」

下ろされたウインドウから聞き覚えのある声が響いた。

（この声は……）

そろりと車の中に目をやると、怪訝な表情の斗真さんが運転席から私を見上げていた。初日からしばらく会っていないかったけれど、彼の冷静な顔を見たらなぜか心が落ち着いていた。

「家まで送ってやるよ。乗れば？」

ぶっきらぼうな口調だったけれど、私が濡れているのを見ていられないという感じがした。

その優しさに不覚にも心がほろりと絆される。

「でも……」

「この雨、これからもっと強くなるみたいだし。とにかく乗ったほうがいい」

「あ、ありがとうございます」

私は体に付着した水滴をできるだけ払って傘を素早く折りたたむと、開いたドアから助手席へ滑りこんだ。

「斗真さん、今日はお休みですか？」

「手術明けで睡眠不足だから、一回ホテルに戻るところだ」

「そうですか」

高級そうな革の座席が濡れてしまうのは必須で、やっぱり申し訳ないという感覚が込み上げる。

「すみません、立派な車を汚してしまつて」

「迷惑なら最初から乗せない」

温度のない声でそう言うと、斗真さんは私にタオルを手渡してから車を走らせた。

「そのタオル、買ったばかりのやつだから。気にせず使つて」

「あ、そうなんですか。ありがとうございます」

ふわふわのタオルは握っているだけであつたかい感じがして、やつと緊張の糸が少し解けた。

濡れた髪や顔、首筋を拭くと、少しだけ体温が戻つた。

（驚いたけど、通りかかったのが斗真さんでよかった）

なぜそう思つたのかわからない。言葉はぶつきらばうだし、決してわかりやすい優し

さは見せない人だ。でも、なんとなく……信頼できる人なんじゃないか、つて直感的な部分で思つていて。

だからこそ、それほど抵抗感もなく車に乗ることもできた。

「……さつき」

しばらく無言で運転していた斗真さんが、口を開いた。

「なんで、あんな血相変えて逃げようとした？ 何度か窓からノックしたり、軽くクラクションも鳴らしたんだが」

「あ……」

彼は無言で近づいたのではなかったと知ってホツとする。

「姉貴は言わないけど、うちに今いるのもなんか理由があるんだろ？」

「え、ええ……まあ」

（そうだよな。なんだかわからないまま長期で滞在してしまつてるもんね）

マンシオンは怪しまれないように契約をもう少し続けることにしたもの、鍵アカウントにしているSNSはしっかりマークされているし、スマホの番号を変えてもなぜかバレて非通知で無言電話がかかってきたりする。

（もう少しお世話になりそうだし……斗真さんには伝えたほうがいいかな）

そう思い、私はマンシオンに居られなくなった経緯と、おハルさんの厚意で滞在させ

でもらっていることを説明した。すると、彼は飄々とした顔を曇らせて言った。

「それは怖い体験をしたな。というかそれ、まだ続いているのか？」

「そ、そうなんですよ！　いつ終わるかわかんなくて……」

今まで不安だった気持ちが一気に噴き出し、口から言葉が溢れた。

「こ、殺されるかもとか……本当に生きた心地がしなくて。でも、警察に行くっていう決心もつかなくて……どうしたらいいか——」

言葉の途中でショートメッセージの着信音が鳴り、その冒頭の文言で戦慄が走る。

「ひ……」

「何？」

「い、今、話していた人です」

それは『逃げたの？』という書き出しで始まっていた。

私がマンションを出たことは知ってる、一度だけでいいから会いたいという内容だった。

（やだよだ、会うなんて絶対無理！）

文字を見つめながら固まっていると、斗真さんは黙って路肩に車を停めた。

「大丈夫か？」

「だ、だめ……」

震えている最中、今度は非通知で着信音が鳴り響く。

「うわっ！」

思わずスマホを手から離してしまった。

慌てて拾い上げたが、着信音は途切れなく鳴り続ける。

「その電話、やつなの？」

「はい」

「俺が出るよ」

斗真さんは私の手からスマホを奪うと、迷いなく通話ボタンをタップした。

「もしもし」

（男の人が出たら驚いて切ってくれるかな）

そう期待したけれど、相手はすぐに切ったりはしなかった。

『お前誰だ？　彼女を出せ。僕は彼女にしか用はないんだ』

相手の声はこちらにもれ聞こえてくる。

斗真さんはその脅しには一切乗らず、冷静に切り返した。

「悪いが今後一切、彼女の声は聞けないと思っとけ」

（っ、斗真さん？）

『何言ってる？　彼女は僕とつき合って——』

「お前、自覚ないのか。どれだけ卑怯なことをしてるか」

『っ！ あいつが避けてるから、こうなったんだろ！ 僕は悪くない！ 大体、最初から彼女はな……』

「言いたいことはそれだけか？」

斗真さんはビシヤリと言いつつ切ったあと、さらにドスを効かせた低音ボイスで脅すように言った。

「俺のものに何かあったら、お前を社会的に抹殺する」

（お、俺のもの？）

驚きで目を見開いている間に、斗真さんは電話を切って何事もなかったように私を見る。

「これで胡々菜にはもう関わってこないだろ」

私にスマホを戻しながらそう言った斗真さんには、今「俺のもの」と言ったような熱があるようには見えない。ストーカー撃退のためにあえてそういう言い方になったのだろうか。

「今のつて脅しですよ。逆上してこないですかね」

「声を聞いたが、小心者の典型だった。新しい男が厄介な相手なら自分のリスクが高くなる。あの感じだと、多分近日中にターゲットを変える」

（軽く言ってくれるけど。あの人のしつこさを知らないから……）

私がまだ警戒心を解いていないのをどう捉えたのか、斗真さんは無表情を崩して小さく笑った。

「そんな思いしてまで結婚したいわけ？」

「そ、そうじゃないですよ！ プロフィールだけ見たら会うくらいはいいのかなって思ったから……」

「そのプロフィール見せて」

「え？」

「今後危険がないとも言えないし。俺も顔を知つていたほうがいいだろ」

（ああ、そうか）

納得してスクショしておいた彼の顔写真付きプロフィールを見せた。正直今は顔を見るのも嫌だったから、すぐに画面を伏せてスマホを渡す。すると斗真さんは画面に目を向けた途端、眉間に皺を寄せて視線を上げた。

「こんなのと会おうと思ったわけ？」

「こんなの……って、酷いですね」

「こんなのだろ？ ストーカーになって、あんたを困らせてる」

「それは、そうですけど」

（写真やプロフィールだけでどういう人か、ってわかるものなんだろうか）
「まあ……どんな男に追われてるのかはわかった」

「あ、はい」

斗真さんは私にスマホを戻して、髪をくしゃっとかき上げた。

（イライラしてる？）

「……」

車は停まったままで、斗真さんはじっとフロントガラスの向こうに打ちつける雨を眺めている。

（何を考えてるの？）

そっと表情を窺うと、彼は今度は鋭い視線で私を見つめていた。

「……なんでしょう？」

「ずっと震えてるから。先に体を温めたほうがいいんじゃないかと思って」

「いえ、大丈夫です。お屋敷に着けば、すぐ着替えられ……」

そう言いかけたとき、スマホからポンッとメッセージの受信音がした。

「ひっ！」

演技でもなんでもなく、私はホラー映画でも観たときみたいに驚いてしまった。

そろりと画面に目をやると、実家の母からだった。

「お母さんだ」

一時的にマンションを出て友人宅にしていると報告したから、何かあったのかという問いかけのメッセージだった。

（ごめん、お母さん。あとで返事する）

簡単にメッセージを返すと、もう音が鳴らないように機内モードに切り替えた。

「大丈夫なのか？」

「はい。あとでかけ直せば大丈夫です」

「……そう」

斗真さんは急に興味を失ったよう適当に相槌を打つと、車を発進させた。

「定宿にしてるホテルが目と鼻の先だ。そっちに先に寄る」

「えっ？」

「シャワー浴びて、まずは体を温めろ」

（斗真さんが泊まってるホテルに!?）

「あ、あの。私なら大丈夫ですよ！」

唐突な申し出に慌てふためいてしまう。

いくら近いからって、斗真さんの借りてるホテルに行くなんて……

「安心しろ。誓って何もしないし、俺はあんたが部屋を使ってる間、ロビーにいるから」

そう告げた斗真さんの声は穏やかで、本当に私を心配してくれているんだと感じた。「ありがとうございます」

（今はお言葉に甘えよう）

改めて自分の濡れた服に触れると、体温がほとんど感じられない。しかも体は言われた通り、小刻みに震えていた。

（恐怖なのか寒さなのか……震えが止まらない）

意識してしまつたら急に寒くなり、私は助手席で自分の体を抱きしめるようにして俯いた。

斗真さんが鼻^{ひいき}屑にしているのは、誰もが名前を知っている有名ホテル『コンステレーシオンホテル』だった。朝食が最高に美味しいと評判で、一度は宿泊してみたいなとも憧れていた。

エントランスはお城にでも入つたように煌びやかで、光る大理石の床は歩くたびにヒールの音が上品に響いた。

（一泊するだけでもかなりの値段だと思うけど……優雅な生活なんだなあ）

「胡々菜、エレベーターこっちだ」

「あ、はい」

（さらつと下の名前で呼んでるけど……無意識なのかな）

「何ニヤニヤしてんだ」

「いえ、なんでも！」

私は慌ててバッグを持ち直して彼のほうへ走った。

「部屋は二〇階の一番奥。覚えといて」

「はい」

大人しくその言葉に頷き、案内された部屋に足を踏み入れる。

すると、照明がパッと点灯した。

（わ、全部自動なんだ）

降りていたカーテンなども自動で開き、ネオンで輝き始めている夜景が見えた。

「素敵なお部屋ですね」

生活感はないけれど暮らすには十分な設備が整っていて、中央に設置された大きなベッドは寝心地が良さそうだ。

「堪能したければシャワーのあとでくつろげば？ シャワー室はこっち」

「あ、はい」

ぼうつと部屋を見渡している私を置いて、斗真さんは先にバスルームに入っていく。あとを追うと、そこはシャワー室とバスタブが別々になった広いバスルームだった。

（ここでひと部屋ぶんありそんなほど広い）

化粧室も美しく整理されていて、常に快適な温度と湿度を保っている。

（確かにここなら、わざわざ家に帰る必要ないかって思っちゃうね……）

「シャワーの使い方はボタン一個だから。温度は適温で出てくる。あと、バスタオル、バスローブはこれで。替えの下着はスタッフに用意させるが、上の服は俺が選んでいいか？」

「はい？」

ホテル内にブティックがあり、そこで着替え用の服を買ってくれるということらしい。

「あの、今着てののを乾かしていただければそれで……」

「せっかく綺麗にした体に、汚れたのをまた身につけるのは気分悪いだろ」

「それはそうなんですけど」

（とはいえ、非常事態だし）

まだモゴモゴとしている私に呆れたように、斗真さんは手にしていたバスタオルとバスローブを私の手に持たせた。

「とにかくここは俺に任せてもらう。服の趣味が合わなかったらフロントに電話して」
そう言った彼は、部屋を出ていきかけて振り返った。

「そういうえば、胡々葉が住んでたマンションはどうなってる？」

（え、どうして急にマンションの話？）

とは思ったけれど、斗真さんの口調は真剣だった。

「賃貸なら、もう解約したんだろ？」

「ええと……それが。オンラインで解約できるんですけど、すぐに引越すのも危険かなと思って……まだ……」

「早く解約しろ。退去を依頼する代行業者はピックアップしといてやる」

「えっ！ そのくらい自分でやりますよ」

こればかりは本気で断ろうと首を振ったけれど、斗真さんは怖い顔をして私を見た。

「相手が怯んでる今が引越しのタイミングだ」

「あ……」

（そうか、さっき電話で脅したばかりだから）

「胡々葉の気配はなるべく消しておいたほうがいい。今うちに住んでも、可能な限り隠せ」

「は、はい。いろいろ、ありがとうございます」

「自分の家に居候している人間が不審者に追われてると知ったんだ。家族の安全のためにも、危険の種は早く潰したほうがいいだろ」

あくまでも私のためではない、というような口調だった。けれどその理由だけなら、

斗真さん自らが動く必要はない。

(家族を守るなら、私をお屋敷から追い出したほうが効率的なのに……)

冷たいようでいて優しい行動を取る彼が、なんだか少し人間らしく見える。

(本当は親切な人なのかも……)

「俺はラウンジに戻る」

表情を変化させる私を不思議そうに見つつ、斗真さんは今度こそ部屋を出ていった。

「はあ……生き返る」

広々としたシャワールームを独り占めし、私は雨で凍えた体をしっかり温めた。

血が巡ってくると、さっきの車での出来事が思い起こされる。

(本当に助かったな……けど、なんでここまでしてくれるんだろ?)

斗真さんはストーカーの彼に厳しく対応して、私を安心させようとした。

それだけでなく、寒がっているのを見かねてシャワーまで貸してくれて……

(思ったより、いい人……だよな)

少なくとも嫌な感じはしない。

初対面の日正直、反感を抱いたけれど、今は少し……いいかもって思っている気がする。

(これって、斗真さんに好意を持つちゃってることかな)

結婚に憧れはあるけれど、実は私は恋愛の仕方がよくわからない。

数少ないお付き合いは、流されてなんとなく……という感じだったし、キスハゲから先のことはほとんどわからない。

自分から異性を好きになるということが極端に少ないせいで、性的な衝動についても今いち実感が無い。

(漫画とかでは見るけど、他人事になっちゃうんだよね……っていうかこの年齢で未経験な女って、やっぱり男性からは引かれちゃうのかな)

そんな悩みを持っていた矢先の斗真さんとの出会い。

今までお付き合いしてきたタイプの男性とは明らかに違う。というか、そもそも斗真さんのような職業の人には会ったこともなかった。だからきつと、普通に会おうだけなら最初から対象外だったと思う。

それがおハルさんのおかげで、ご縁が繋がった。

(斗真さんと本物の恋人になれる可能性……少しはあるのかな)

鏡の中の私は緊張なのか期待なのか、顔が熱くなっている、不安や恐怖はだいぶ薄れていった。

(でも釣り合いの取れない人だし……期待しないでおう)

私は軽く頭を振って、今考えたことを散らした。

バスルームから出ると、バスケットが置いてあった。中には新しい下着と斗真さんが選んだであろう新品の服が入っていた。それはミントグリーンのマキシ丈ワンピースだった。

「可愛い」

自分のために斗真さんがこれを選んだのかと思うと、一気に胸が熱くなってくる。

それは着心地も最高で、シルクのような生地がサラサラと肌を心地よく包んでくれた。(ホテルで売ってる服だから、きっと高かっただろうな。あとで金額を聞こう)

体も温まって、すっかり元気を取り戻した私は、部屋の隅に設置されたソファに座ってホッと一息ついた。すると入ってきたときには気づかなかった彼の日常生活が、部屋の中に見えてくる。

相当に本が好きみたいで、ホテルの部屋なのに本棚が置かれている。しかもそれすでに収納力をオーバーしていて、溢れたぶんは床に積まれていた。

(仕事の合間の息抜きが読書なのかな)

何気なくデスクまわりに近づくと、何種類もの海外のビール瓶がコレクションのように並んでいた。

(お酒が好きなのかな)

きっと彼にとって必要なものなんだろう。

体の熱も落ち着いたので、私は着替えを済ませて斗真さんが待つラウンジへと下りた。窓際の席で斗真さんは腕を組んだ状態で目を閉じていた。広い肩幅にぴたりとマッチした薄いブルーのストライプシャツが遠目にも爽やかな印象で視界に入る。

近くに寄ると、彫刻のような顔が少しずつはつきりしてきて、急にドキドキしてくる。(改めて……イケメンだなあ)

「斗真さん」

呼んでみたけれど、彼は目を開けない。

どうやらこの姿勢のまま眠ってしまったているみたいだ。

(ずっと待っていてくれたんだもんね……お仕事帰りだったのに、申し訳なかったな)

「あの、斗真さん。お部屋に戻って寝てください。私、タクシーで帰れますから」

「……ん？」

パチリと目を開けると、彼はしばし私を見上げてから、ああと思い出したように眩いて身を起こした。

「震えは止まったみたいだな」

「はい、おかげさまで。あと、この服、ありがとうございます。おいくらでしたか？」

「値段は気にしなくていい」

「いえ！ここは払わせてください」

私の譲らない意思を感じたのか、彼は好きにしろと笑った。

「まあでも、サイズが合ってたみたいでよかった。それと、マンションを引き払うのに信頼できそうな業者はビックアップできた」

「ありがとうございます！」

「詳細を送りたい。アドレスを教えてもらえるか？」

「もちろんです」

私はバッグから手帳を取り出し、自分のメアドと携帯番号を書いて渡した。

「すみません。本当に助かりました」

「俺は面倒なことは一切やらない主義だ」

彼はメモを受け取り胸ポケットに入れると、ソファから立ち上がって当然のように言った。

「そろそろ行くか。家まで送る」

「えっ？でも……」

「心配するな」

彼はくすりと笑って私の頭に手を乗せた。

立ち読みサンプル はここまで

「今、軽く仮眠できたから頭は冴えている」

「ソファでうたた寝しただけじゃないですか！」

（これ以上は迷惑かけられない）

「と、とにかく一人で帰れますから。斗真さんはゆっくり晩酌タイムを……」

「晩酌？部屋で何か見たか？」

私が他意なく口にした言葉に、斗真さんは怪訝な顔をした。

「あ、ええと……」

（深い意味はなかったんだけど）

「ビール瓶のコレクションを見ました」

「ああ、それでか……」

斗真さんは納得したように頷き、私をじっと見る。

「軽蔑したか」

「軽蔑？しませんよ。だって……斗真さんが必要だと感じるものなら、きつと必要なんです」

「……へえ」

「実は私の母も昔、夜眠れなくてお酒に頼っていた時期があつて。父が大きな病気をし入院していたので、すごく辛かったんだと思います」